

ごえんせい 誤嚥性肺炎 広報げろ 2019.6

誤嚥性肺炎

人が生きていくうえで必要な栄養を摂取するためには3通りの方法があります。

①口を通して呑み込む（嚥下する）方法です（経口摂取）。健康な人ではごく普通で、最も効果的な方法ですが、嚥下機能に異常がある場合は、誤嚥性肺炎や窒息の危険性があります。鼻からチューブを呑み込んで胃まで挿入し、栄養を注入する方法もこれに類する方法ですが、とても苦しい方法で誤嚥性肺炎の危険性も高いものです。

②皮膚から胃や腸にチューブを挿入し経腸栄養液を注入する方法です（胃ろう、腸ろう）。入浴も可能で日常生活にも大きな制限はありません。嚥下機能が回復すれば簡単にやめることができます（皮膚の穴はチューブを抜けば直ぐに自然に閉じます）。嚥下機能を失っても生きる意欲のある人にとってはとても有効な方法です。しかし、寝たきり状態で体力の衰えた状態では、食道胃接合部の機能異常のため胃液の逆流がおこり、胃酸による誤嚥性肺炎を引き起こし、とても苦しい状態となり、死亡の原因にもなります。また、加齢とともに胃腸の機能は低下し、どのような栄養を注入しても吸収できなくなって終末期を迎えます。

③皮膚からチューブを血管に挿入し、先端を大静脈に留置して濃厚な静脈栄養液を注入する方法です（CV）。手術の後や、一時的に胃腸の使用を休めたいときなど、経口摂取ができない時期に栄養をつけるために行うのが一般的です。（経静脈栄養、中心静脈栄養）。二週間以上の長期間続けると皮膚からチューブの刺入部を通しての感染や、異物による感染から敗血症を引き起こし命にかかわることがあります。入浴も可能な方法として、大静脈につなげたポートと呼ばれる装置を皮下に埋め込み、使用の都度ポートに皮膚を貫いて針を刺して液を注入する方法もあります。しかしこれも異物が皮下に入っており、針を刺すときにも感染の危険があり長期の使用は困難です。

★延命処置を考えなければならなくなった時、人工呼吸や胃ろうは望まないけれど点滴だけお願いしますという声を聴くことがあります。何かをしてあげなければというご家族の思いもあると思います。しかしながら一般の点滴（点滴静脈注射）では、一時的な延命効果を否定はできませんが、生命を維持できるだけの栄養は投与できません。栄養保持に必要な高濃度の栄養液は末梢の血管を傷つけすぐに利用できなくなります。

★誤嚥性肺炎は嚥下機能の低下とともに起こりますが、寝たきり状態では特にその頻度が増加します。食べ物の誤嚥ばかりでなく、不完全な口腔内ケアのために口腔内の細菌の誤嚥が大きな要因となっています。これは特に、眠っているときにおこりやすいものです。誤嚥性肺炎を繰り返すと気管粘膜の細菌に対する抵抗力の低下が進行し、回復が困難となって死に至ります。

さて皆さん、ご本人が、またご家族が人生の終末期を迎え、口から食べられなくなった時どのような選択をされますか。常日頃ご家族で話し合っておかれると良いでしょう。

下呂市立金山病院 顧問 古田智彦